三日月物語

へ 13
3229
6止

東坡心の奇事

へ 13
3229
6

昭和十四年四月

去年上木して名公惜陽狂今年戯作
去る西名を流行せり四方先生が狂詩
如謂も宜れるこうか昨為り講釈師の
為永と呼ぶも今鬼毒編文漢の抄録
也改名世る時めくに本早七年政人社作を
狂る長の仙女香とこそもよ長く高作れと同く
雑へり其題向乃人氣をいと抜き是八百善の

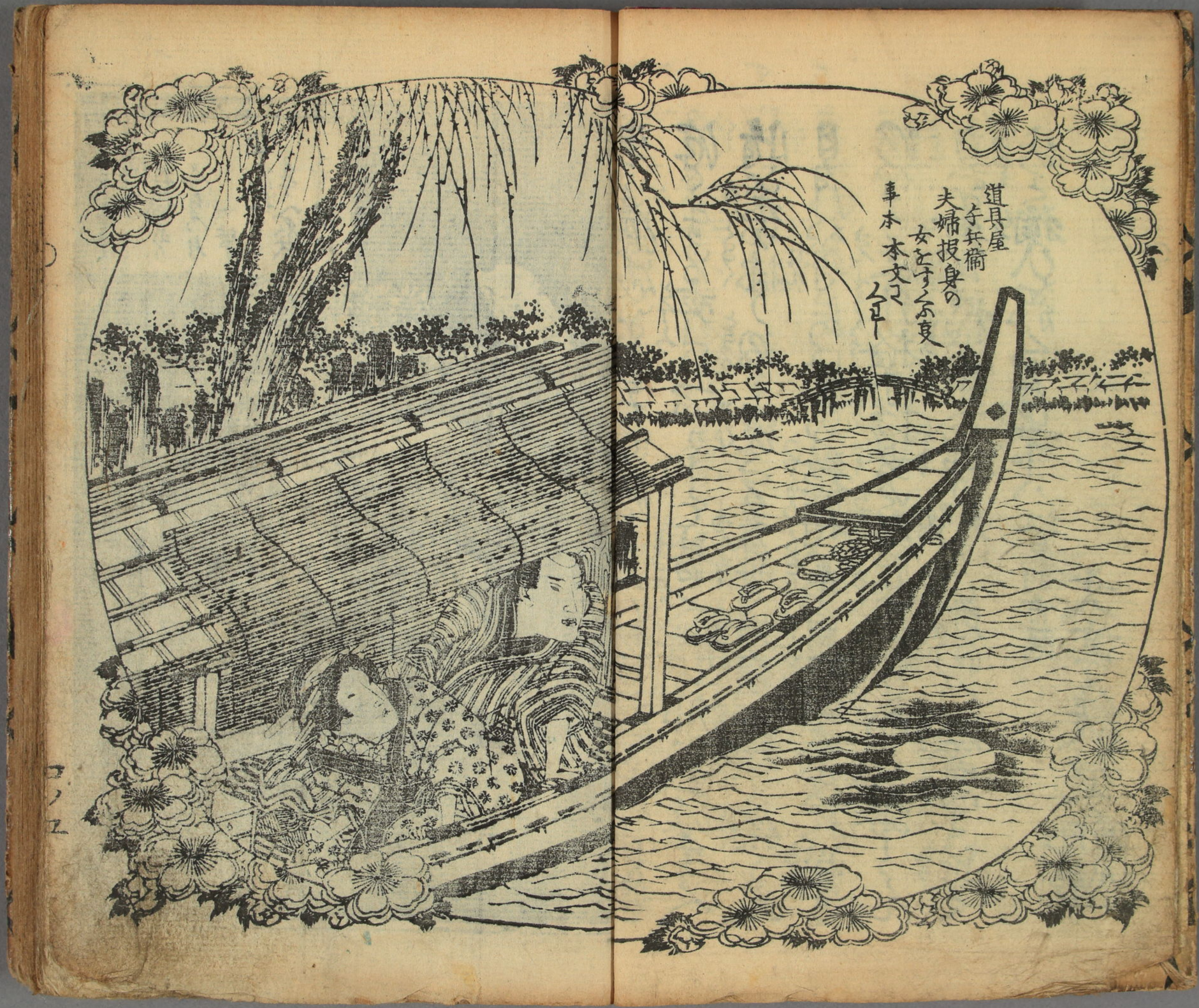
料理乃めく美味を始めむる船橋屋社菓子
こそ〳〵いとの技巧くを賞とせしがみ見
連乃北〳〵星ゆゑ中ぐ中ぐ見くもしを言ふ〳〵ぶ
きべ燈台猪にのいろくさ数限なき当時乃
流行前をとぐ技を要とすれば癖を見たの
者く医者くれる按摩屋乃戈智仮
宅こそ来系やりし物賣美濃が一世代戈覚
鄙くさ遠こ茶屋紹介ら郷も信系ぐ安ば

函館〳〵江戸乃根生ぎい戯作者も大阪乃の
近松と名来り太夫持が様ば持ば抱へ屋敷を
持こと人ぶ三味線笛太鼓打乃類の者へ見れば
燈ひん灯の提燈こ鉛燈ぐ皆是天地の
造物めこを更こ人工者乃ぐ悠然と
高慢と稗史の名詮自性ぐ乃ぐ見ば
俗こ見安き合巻乃戯場ぐりぐ書綴ん
を何ぞ蔦蒲とひ紅ぐ〳〵其系行も

潮りがちく日数ふりたし五月雨意の潮漲の
水勢ら堤るゝを通ひこゝを通ふまとみゝ川流れ乃
末ゝ深川や濱氏真砂の時の死頃思ひ出ず
潮乃嵯と世ゝ惜まれ俳優と相撲ひとゝく
西へ引入で西かゝ海来駱絶の評判裏渡る
両国ゝ人と黄金乃山公なとも偏ゝ太ぶ
きゝゝと川代を待く神宴舞ぐるく廻る
月明し行道春雨西来布乃時代好みも
局女郎ゞ上着とゞまゝ狂言稽乃物数寄か
村乃兄ゞ聞拍と変ゞ丈まを補ゝ海部
鮫公花車か男ゞつさゝゝ通ゝ通ゝ楽
紫頭換様も四ゝ暮か親父乃手拾ゝ寄り
斯ゝ紅を解ひゝ奇かれこゝけゝ
毋ひゝ赤から大まゝ花髪ゝ流ゝ寵公
海鼠ゝ丈い眉利ゝ増ゝ哉ゝ
高偏ゝ住居をゝ人ゝ蘭浦林月ゝ甚

名所照らし猿ヶ山に留りつゝ北里の
茂り一枝の藝を匂うとや善孝が花
咲桜川まの流まを清せば湯又ゝ所稲荷
瀬川の水を汲りまも一先是も一先とゝ
るが中みも何某の者の加持の駒求り誠
坊氏の神ゝ源ゝくかゝ浮世ゝ
色に乗こう路人乗の結昌こ陸人七十二文
歩ぶ蒲焼とよもゝ吟ゝ沙と長宗漢
清ぐまる所八つゝて昔ゝ清の外に出人きゝ人
情を乗り掠り過ゝ流ゝる春雨多須ゝ俗ゝ三
月月寄こうけゝ乗待茶屋坂本氏に栄
ゆゝうゝ矢格子揚巻乗と吾ゝ中の者ゝん
夜ゝ矢弓稲荷遥ゝ
出ゝ頼人ゝかゝる五下ハ江戸前市隠

文亭綾經


道具屋
子兵衛
夫婦投身の
女をすくふ夏
事本 本文ニ

きぬぐの新法師あり
今月月
一華
華の小枝も
多うへの秋
深松
道具屋重蔵
三日月門仙

仙女香乃製造所
作主たるべし　三月乃春
文亭

此草帋を春花に
見せまくのみ　三月乃月
下總金江津
三月菴
宗旦

春曙美談　三日月阿專巻之一

雅名　本朝好逑傳

江戸　南僊笑楚満人稿本

發端

關々たる雎鳩は河の洲よりあり。窈窕たる淑女は君子の好逑と毛詩にのたまへる古詩の人は彼の雎鳩の絶たるを荒磯より。雌雄むつまじく群遊ぶこゝろを君子の夫婦礼義あるよりて賦したる詩なり。

大元雎鳩といへる禽は。いとく人を忘るゝ事人に海濱よりのミすめるなり。あへて人の爲に捕らるゝ爲にもなく。安然として易く天年を全うするを人間の上に譬へゝ世塵をさけて山嶺に引こもる隱士に異ならず。爰にそなへて引こもれて別荊棘の林にあつて。のさくるも節義をうしなはず。住人七子にあつて終に負擔を全うする一枝の物語あり。そが由來をいふに。兼倉繁栄の頃。扇谷に未廣嶽亮春風と云へる人。未だ冠らざる文武の道に人にすぐれらず。又傷茶夏を嗜み。專ら泉石を好むの癖有つゝけるゆゑ庭前にいと古びて幾年をや經ぬらんとおぼしき燈籠あり。高さ三尺ばかりの燈籠竜の石と火袋のみあつて擡石なく。遠近の石工をめして。これが擡石をせんさくせさせるに。似ても似つかぬ無下に新しき石のみにて。あくてんに叶ひもの石なりけるに。年頃

是を不映の夏と思ひそ。うを仕面へ人をつかはして
廣くこれをのとめひける。斯て或時春風々城
外へ放鷹に出のひしが。とある原中に撲ちとりる
石のいろふも苦むして。その燈籠の掉石に表さられ
ふとこゝろうるる石あるとけ見べ。彼のわるに喰び
のひ。かく我が屋敷の辺りに叔石あるとも拾
ざるべしとて。石工どもの全く等閑にせしにより
ひとへに早速家人に言付て。彼石を庭へ引うせ
掉石にせさせるに。あるとも始より是に作りて
石のごとく。その古びとのひ苔のこまりしに宇あつ
たるの道具にとりけ見べ。よろこびのふとかぎり
なく。其夜は彼の石燈籠に火を点じ。大きなる酒
燃穴催し。乙稼場うるはしく家中の面々へも酒
を賜はり子るる。須臾寝所に入るひね。斯て
其夜も深くと更行まくに。木行も深むるとのに
なる及満ごろ春風々は風と目覚て見るに。アラ

不思議や板の辺りに五つ夜よ緋のたろきてる
いと丹しでうる花女簡捨扇をかざし。妙絶として
えもいはぬ風公ハいとのいとおもしろ。
雲ハいづまの山方ゆて。何色を愛へハ有とし。
哉と語りとゝぶその答へハうゝて一首ゑを口吟
ゆふその哥よ
我為の下のゑる苦おせぶ。そもう有ぎも
ゆふとゝ泳じゆふと思へば。南柯の夢ハ覚よける。
覚て後あつとくと彼ゑを覚へ居ゆへ其次の日
辺りの侍ゞ。ゆふ。夢のよふ。と語り
関せ我日頃あへて和哥をこのむとゆもあらぬ
よいづくしてかゝる夢をんしうらんとゝ不審みて
とゝゆふ満座の人ゝ只奇ゑうるハ夢ゑうりとゝ
いらへて皆てその是非をゆゆゆるゝ
未定よあり。ハ臺所ゝり使ひよ。ゆ。秘の
千年とゝ。ゆ。ゆ。ゞ十五六ゝ。ゞ。ゞ。ゞ

ゆう。嶋つたへ入りくど。はかどゞ廣さ五六丈若干丈遠望
有つゝ石燈籠の掉石を城外の郊原にて得
のみ。しかや其石こそ貴人の墓下うえどゝ
あらんも。石工佐くらず。若干よく洗ひおきて足
のひらゞ分明うつらんと。河の殿も実の花と赤きゆ家
臣に言付て彼掉石を洗ひて足のすゝ清水納言
曙塚とのゝ數ヶ字を彫付て有けゝ春風公を始
新しく其事を感じ給ふ。坐の人々かのお女が前足のゝ
うらうず。初てうのゝ歳が顔たゞ丹とんのゝ桃花の
よそをひたを。ゆゝ。紙に流魚落下閑月羞花の
あつきゆ要こそ亮どのゝ。うつりをゝ足をて皆
河もうつりゝが其ゝとのひ器量とのひ。彼の清お
納言ゆもたぢずゝそ。則はきとり曙とのゝ名を
下ゝあるゝ丹墓所く達て丹所望ありゝゝゝば丹墓所
も殊の外うる賢女ゝ月ゝゝゝ早速吉日を撰み

曝とお表へ進ぜらまとければ春風ムヤよろしさびの
ひ。ロ寂花ぞうぎりうく昼夜ロ儀をたてうしの八ず。
ロ側室さるこどのてやしぬ是這草紙一部の發
語うまとば看官ところをつけて續のくらし。

第一回

李文始

風鈴蕎麦や犬の麦あんまの笛の音もさて。研ぎ
ぬ〳〵川風や。鐘さえ氷る冬の夜の月も絵よ雪降れ
ば。

賤しからぎる一人の娘。年八歳く十四五ようやうら
ずとんあまども。何ぞ患よちづみ。体袖を顔よ
が。當て。只さあぐくとうげ〳〵ーが。斯てハナそどを小
石をひろの。袂よりまそ身づろひ。南愛あそぎぶう
みぎ仏と唱ふる姿とのろとも。身をおどらして
川あく。ぎんぶと飛とみ忽よすぐこふ凡ぞうりよ
ける。かるる水く川下より漕ぎくる船よ乗る人あり。拾
ぬよ在る人ぞ。ふるく人ぞこのふよ同じ鎌倉米町

の商人は道具や與へ籌とて有徳なくらす市人
なれど夫婦ともに情深く慈悲心あつき気性なり
しが今日しも所用ありて夫婦づれにて高輪の
邊りまで行てありしかくるさ今の音に怕りせしが
女房お亀ハ夫にむかひ「モシヱ今の音ハありやア何で
ございますねヱ 与兵衛「ヲヲ何ぞ橋の上から死のと
いふでハ何ござろうノウお亀さん 舟頭「アイ大かた身投で
ございませうよ お亀「ヲヤそれじやア上のそうるどうぞ助けて
ありふれのものでございます 与兵衛「馬鹿な事をいふな人の物ご
どようあるものか。ト いふ折から死もの狂ひの身投げのおんな
見るより引とめてくれる夫婦供につれて来る船頭の者
舟守丈と眺へて片手にて髪の毛をつかんで引上ければ
夫婦の者。与兵衛ハお亀もろとも介抱なしければ
せなかをさすりなどしてやうやう息をふきかへし
気がつきけるにぞ。おかめハ「ヨ
女中さん何ゆゑまで身を投るほどの事
まで思ひつめなされたの事でございますぞ
いかなる事やら今の音をきゝひとしく驚き
見ずがしてく。どふもそろそろは可哀そうでならず

助けてあげたき。折克連てくる男が。おまへの命を助
たも。一ぺんこうぬふーぎうの縁。ほけをとろ〜り新て
ちゃうせうされませ。まことその上でも相談のかまも
じぎります。そうぎまく。若いお方のはつこいる
短氣うの夏をさろーやうはいの手ずと考まてこの重ね
涙まぬうらのうつそ死んで未練で涙ふと娘ゑの一
筋よつきつめて武仕業よおうんごのでおうがたうも
のうち不簡ご死んで花実ぐさくめの縁と時節の
末をまうこら目出度夫婦ようらまう夏もあるよ。
おいら達ぐうとろの夏のふめへ。ツシテアかめへのうちハ
武辺所ゑ月見ばまんぎら町人や職人うえぞの娘ゑ
とうんくねく大方お屋敷ぐこそぐりませよ。深
実月者ぬ夫婦ぐ河娘ハいとぐ涙おやこり娘ゑれ
狂言よおろーやうく下さりまそ月見ハ夏の親ゑ
おうぞのね水鉢有ぐこのとも焼ーのとも鉢ハ河ゑ
尽さ豆ますぬうさこ〜ぐ武ふる夏をいくてまー

たを定めて名義よでもかぐを親のあるとぬ不義
徒よ世まり言紙うきの不離うと思をませうぐ
きらく左振る夏でぐどざりませぬ子細あるく
其名ハかさ五十せれどりさてぐ父とハ比孫
倉の去る武家方母とハ継くしき中幼ハ特ハ
隠ぐとうしとうぐて下さりまくぐいるる夏おや
近頃ハ父の留守ハ無理だりやまてそれハ
く持てんぐも房はらる五歩小鳥へ流れ
ぐりりりまず又とやまず五歩有
まてハ内外の下女たしこよいるまでこる母きる
とびへらの私ぐ夏を何やうやと有る食るのと
告口のその変くよとりあげぐつるろくいろさ
るくやしきとくくて比年月ケんを一日ところふ
笑よてくらしと夏まるく泣てあるせ国の内比若
ちみくりのそのの死ぐ方ぐまくであると今霜
蜜ハ屋敷とぬけいで人る死折を幸ひと我身を散

ら子の花を掲底の水屑と覚唐せーをふてび
あるてを助けーまー旅しい夏へうまーけまどどと
行べき當もうく今更うちくハ尚行まぞノコリやまア
どかせうどかたてらよろふト又すうろたと泣ふ丹ば。
始終をとろんと子羅ハゆて一うるかとかを美り
ままうまびうをくおのとーのあるこのお男のうへまて
かきうふお助けやまーこからハ。何呼までも。おかる
うくくお世話をいてーまたまうが町人商人のれ分
うら。蟹へばのようる六ケ条夏ら出ままうまて五分ハ。
五分のからぐ。てまハ胸ちとまいてーませあぐ何と。
やとすわてハお武家さのお娘さる。そまを町人
風情のまこ子ぐ。おくまものやまうて後日ぐどう縁
つぐまのりまを春うもまこませあ花何すさてまを
聖まこますのでもぐどりませんぐ。モシやそこのく夏ですー
ぐどりまーハ。後うてあるこのお為ようりませあ。角
へおくりうきれまず夏ぐうりませずハ。親類方の

うち。何ぞ四季家ところ四間掛とろいろふる方の紙く
お供中手まうが。そまでどのでごぎります
サそまでも肝分の四季家の殿さまとやっぱ只今の私
の母と何ぞら訳とやらでごぎりますとやら。それりう
てうろく私の中夏。ちろとまとりませぬ
そまでは四季私パテとまうと物ごト思まの体よ。
お重ガ一モシそうら何で町家のうちよ。
町人のふとちろ。
當ハごぎりませぬ

當とやハまづ平塚の横河とやらよ私の児時の乳
母がおりますそよでごぎりますが終よまいりまと
夏すごぎりませぬ。ちろ人の話で吸ますと其乳
母の真まハ甚物師とやらそよごぎります
そうらそこがく雲へ名ハろくくまるねくでも。
そよいく商賣うら。ホ子ハ昇ねあろでおろよ。大方
親物場の木戸だんう何でぞ。あすこいらひと
そんる者ハいくらも居るからいくと笑こら。まねく

を受ハあるゝ。マア何よりかゝりてのつ延ばしなもわられゝ。コレ船頭さん大きふおゝくゝ喰とゝらせやー。

骨折ハあげるからとてもの序に横網へつけてくんな

せゝ。時ふ四ツでもあるのう　舟「アイあふ四ツすぎサ

ヤ四ツすぎでもまゝごあるまそわるごろうゝそいで母うて

くんうせゝ。そべらがうよさまゝ晩ごト　こまてろうこまゝ娘ハ

おかあさんと彼のおまを

[illegible]

[illegible]

きまゝ「ヨヤくゝもまゝ大きふハ娘さふでハどざりませんう

つぶ

滅よ大きふあうゝ接ぶーまゝこうゝ。きろたゝり初ま

まーうえんぐ。そーてまア其ハ娘ハどふうきゝりまゝこ

のでどざります　ザアこれふハ陰く深のようまの

あろう夏思ひがけのふひ乃まま婦の厚いお世話よろう

まチト。ゆゝて乳母ハ二人よむろう　何うよふまチハ

存じませぬ。このお娘さふハまゝさくゝが稚児時乳

をあげまゝくゝお方。おみおまゝ

私も貧乏人の夏の衣を縫ひまして。お屋敷へまゐ
りませうかと。去年内の差図兼もうくうりまして
そこらへ私も獨り者すぐ洗濯賃仕事。襦の
花やみすや針。その日かせぎのひまうきよ。つねぐ
ひめハ貧りまして夏ごとひ音信もいつこゝまでせのぐ
ありまして。夜深といひ月夏夜類もいのふまどれ
てあることまする。ことハまゝどのの紀でござりま
すト

娘ハ新しくをめんぐくうきとかゝ
とハ夏

ふのハ話さとこーどすハ今日ちつと用夏ぐどぎり
まして高羅寺の辺までまのりまこかくり花ゐ
捨の下をあで通ってまして。何ら捨のうくらぞん
どのハおとぐーしてあく花込へ。こーふ身沒げ。さ可愛
そこ。どんな人ぐろ去られくぐ。死程くでも滅そこ
ゐ助けて進ぜてくりのぐと。思ってこんぐ通ぐーこう
深きあぐらこーやるを供よ連て男ぐ折ってく引上げ
たれバ出ハおまちまのぐ。賤しくそぐこれお方とれこ西。

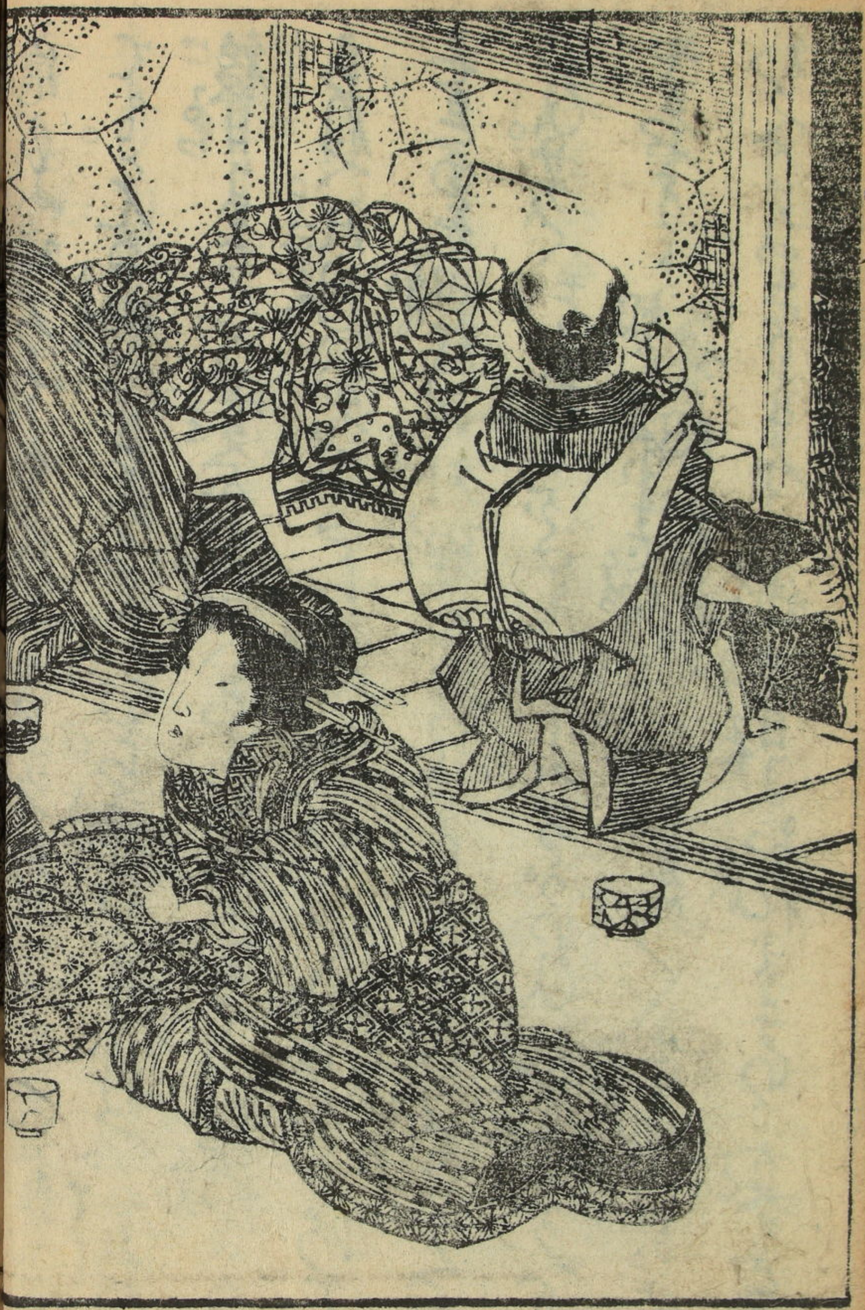
飽くとお屋敷を喰てもあるべきやらぢ。こまるら隠く
膳の上の五増すうけて思ひもよらず。独り
でッたのよいこ〜きこ。そこで町家よりお公安い形が
ぐりきすを喰きこ〜こら。横綱ようふの者があ
とあるべやるから。そこまハ幸とお供をやきこ〜ぶ。どう
おきくお世話をうきてあげて下さりきせねうと。始
終を喰て乳母ハよろこび。そこハたやどこのお方
うどんぢきせめぶ。よろこ〜ぶ。どしん甚郎あり難ぐさり
きす。お娘さのお兼さのハ深いれ恵よろうきー
と私おこぶ手ぐらお世話やさのぐうんとこ〜
きせう。只今おそこのやきこ〜通り私も連合よる
くうらまきて寡ぐらしの不自由ぐちでハどさり
きすぐ。あるこ二人ぐらのなぬ日や廿日ハどこうりとこ
しきせう赤い他人のあるこ。このよふな夜中
ぐきふ婦ぐりぐぐと私ぐうちをお尋ねうきうく。お娘
さのをお連きこうきてくぐさるもの。その義理とき

もおくさまのやさしきねがうり牛蒡ト。頼母しげうる
一言よろこんでおろめも感ぜうしモシ旦那アノ私
ハあつてよりお願ひがござります　きさま何のことぞ
改まつて。願ひの無ぜのとハ他人むき夫婦のうちで
何の遠慮がいるものう早くのうせくうんのことぞ
ハイそんならやはりきやうが。このお子ゲ子コトテハ
どのもかんのそこでく。とんでもない肌うすで見すぐらい
ハイろをして居るとハ物ゲ一ッたのようりまして
涙がとがとてうつとまはぬが私のアノきづくの少紬や
羽をぶーつけげがあのお子よあげてくだがよでござりま
あやうれ。一ッてそまハよくく氣ゲ付うまつて。そのきろ
きやうるがいつ。アノ着ゲよ持てきてハ小紋の紋つきら
ハイちりめんの雀の紋のうのこのでござります一ッアく
何ですお寒ッ。あのぎご早くやつてあげさうせへトハ

二つかさなりの乳子「モシとまゝあんまり無銭ごと。人増
世ばかりまゝ子のごと」
世ばかりまゝ子とあらで。何でも先どろのものハ金ごうら。
あいの子何で買ふことあるでもまそてくさせ人ありとも
あげてくゞうとてもも折悪く持合ぬ銭ゆくらとれで
勉うせくといつよ乳母ハ涙よんと「てうえの効
体うこの仕ろ子の為めハあるとゞくハ命の親ハ思ハ
海とも山とも。ことくとうすうこのかどうに其ようまハ
不便ゞうとこの為物や。金ものを

きりまチとハ有ゞこのとうまとも親ハ親よ
尽きまとませぬ。モシお嬢さまあるとゞ方よ。乳とあり
あるうとませトのうまとたまあるあるとゞ方のハ深切。
あげこ二人よ
「あるとゞ方のハ深切。
知んでまるうまハのてままぬ。併ハ乳母とうりまとく
聖とまるまとぬ。私うまとハ。のうるハ恵を送ろふを思ハ
のうとかこーうもく。そまが若労ようりまチトます
涙よりせうくまハ「エ何の夏でどゞりまチ。そまを
だうるる物とあげてそ。何ま私の為上よきとろと

の程なる夏でもあるし。どのように関東へこれがあることを
のうそも可能そうそうごろうら家へも連てのうてもお世話申
たいとまるやまみが最前すもあげことより。縁も
ゆうもうのあうことを途中うら同道申まして八宿
府がすうさまの世話うらそこで彼方をこうぶねて
離しやまの世ぶそこまで私どもの志八届ことの
ますのめでどざりますす。モウこちとも九ツすだでも
続の内でも大てのあんじて居る夏じやうねく。サテ
亀のの帰ろうじやうねく。コレ久助や楽しい内へ帰つ
てもこんな新をきめくよ。おのら連八うまうねくがとろや
後日まそんな夏ぶ世間へまるこ。あるこのおるよる
らねく只内へかくうらら。鶴合がいろくやぶうくうて。
こまこ面白思ひの外連くるうことだりのうておくぶ
のひ。サテく モウお前ぐすもげくうるぶのひ。私たくうく
やうくうト何ぐらうすまで行ぐ うぶ 「とまくく 左様ぐうら正ウ
夫婦が鶴よ家世話 ぐ
おくりうさりまする。併後日よ礼よまるる夏もぐ



つまらぬものでございます。わるくこのお宿へどちらでお名は何と申します。
どうぞ文をおつかはせなされて下さりませ。八三郎と申
しまして私も折角の志ゆゑ無ようございます。わるくこのお宿
家をお名ざしなされましたらば私の名呼び申上さ
とて無ようのお縁がどざりますゝことらば又お目にかゝり
ます。夏もどざりますやう。併わるくこの頃も
短氣なおもうきをおのもうきされますと切なきぶ
あの代なる夏を申上ぶ義でいどざります。
まぶ何をやまして。四年若の夏でどざります
からぶゝめ遠ひも多くのあるとまるやうと必ずの夏。
大切ハ細瑾をとくりれぶどもからやう夏ぶどざります
とんの世話ゆもうらねへ夏。やまずのでどざり申ぶ。
そふうぶどのようの恥をうけてもその恥しをを義。
嫁申して居ますまぶ始終よの夏ぶ有ますの物でも
どざりませんサ此ようの夏をやておりますうちも
夜ぶふけます。ちくもうとくりをお休みうきされます。

ゆうべらば。モウ夜ハ更ケテ。ヨウ〳〵ト名残オシゲ
ニ立兼ル。おかめをいそがせ〳〵帰ル。跡ニ乳母ハ娘ま
ひろひ「モシ娘さま。人ニ入鬼ハ入るのとやうもつまも
何所の人ぞんじませぬ。あるその厄難をすくはと
いひ。孫ニ小袖や金まで。めぐんでくれてこノ門ニ婦
名所と聞てもうとまこと。ものいふ。跡の跡までを案ド
ての今の祠。碓言へ名所ハ先ず。後日ニあること
ばかりさの。兼倉中をさがしとり出をあるく

つまこまもすがよりへこぎりもすまつうまと
ゆきれ〳〵こぎりもまつうまそう早の山深うりませ。私の
内ハあるこのめすようあるこ夜具も何ものこぎりもよ
せぬ。もすぐも山蒲ぶ〳〵さうとりとりてあること
もすると。こまをとおあうきまて只今お美ひうきまてこその
の物をとりてげ〳〵うりませ。てお寒うこぎりもまそう
「イヤくもこハ寒ハうのいろらそうてこもまこ年寄の
落ぎをして風でもうきまそうてふるハ程よ。ふと風て

籠や〳〵イヤ〳〵何のもとこそふまろとと寒のと火鉢と
ものを植て籠まそかからちろとも寒い夏ハどざり
ませぬ。サア〳〵早のお休ましなさるを一寸せとを疑ひよ
ものうとめの山の中ぞ籠傷る是かくて彼の嬢ハ山うとら
ずも横綱なる乳母ぶ方よ食客ところり一日二日とくら
もうち憂愛ようなくものの重なる時や来りぬらん乳母なる
ものの風と風の紙と赤ぬ甘せぶ日ぬ増〳〵病ひ重り頼
ぶくるくけるぶ嬢ハ仏なる方なく。昼夜看病
怠ることなく神よのりなくと必祈願を
尽せども露だにも来ることなく今ハこで命旦夕よせる
けるぶ。この老母ぶ店借なるものの氏神よせんとなくの
嬢ぶるみ楽る方へ引ぶと横綱の店とぶ。仕舞物屋へ
責ぶて〳〵何方へ行しや。知るもの更よるりけと。

春宵美談 三日月阿専巻之一終

春雨物語 三日月阿專 美談 巻之二 雅名 李朝好逑傳

江戸 南仙笑楚満人 稿本

第貳回

浮川行孔流といと多かれがうつゝ頃鎌倉佐く女ケ谷佐く女ケ橋の辺うつる局店とりのくる遊女屋の光景をいとゞ目うまつゝ高貴うゑんどゝゝ猶に奥あるる夏ゝぞ有いるそゝ奈何ゝとのゝ先此廓の入口ハいと廣く。内へ入うとゝ月まゝ街幾筋とまるく別まて一軒くゝ

火の要慎路次六ッ切とあらしくる行燈をかけ黒骨の腰障子ハそれくる狭き所ふ夜の物あるハ鏡臺らびひ茶碗なとどうらべおきて粧ひくろ女のあらみ火鉢よあくり待てこや噂くとよぶハ客人を待ふやあるひハ亦十二三と覚しき切禿の戸口よ立て見もあらぬ人の袖を引とゞめてからじと争ふ空とつて遁んとするさる彼頼光の家臣渡辺の綱とかちんが羅生門のおもかげふ彷彿たり。新内の門附さんげくの法印ハ傍手口へまわり。素見の武佐ハ高砂を謡ひつく女の顔ふ見とれて足元の犬の糞ふすべるを覚へず。かれ賀哉しきも夜を昼なる別世界あけてくやしき玉手箱朝ハきすかふ寂莫たる何国も同じ後朝の情よ變らハまるまえり　扨てかくる歓ひからぬとてあきのづる儘ハ右之巳の刻ごろと秋しく上京八丈の肩入あるとてら着る三十五六の鯔選廿二三の若い二つまで手拭をかぶりけ縮緬の丸ぐけを夫れみお手を口ふくわへるさまいとゆけるく覺「ハ吉さん／＼まゞろ憎のごときこ人ありそく隣の内の門ぐちより一湯へゆく裕へうく。モウいりもの金時やきんがかくあまつきうら四ッるでごと見へるサアく一ッ所よあらび

うぶ人ト（女郎これも同じこと）「ヨヤお清さんよ」お辰さんすて
きと勘おきざの。おのらハ今朝ごとお客をかくして。ち
ひとろくとあること呼ぶ。小用よりのこく モウ一ト寐いると
あろうとこの呼ぶごろる。モウ先へ行る「そろそろそんろらお
いらこちだろうのとの。清人る女ごのの。モウ今朝ハゆっち
寒い。早く湯くのつくあろうトまらうト（いとこ物ゆらろうハ
へてどちらの上へまえをきて。芋銭のできる銭をとの上てろハ
玉銭をあつのるとあるく。○作者曰切店みて銭銭をあつのあるく
ハ銭次ぎの銭ろう 雁一ヨヤお清さんお辰さんゆうら早いの

間うら出居ぬ出ぬ居るお勝さんとのの女郎
ぬ前の噺を吹くかんこ涙ぐとるこよ。八「ヘン
大笑ひご。鬼ろ目の涙ころう「そんるまきろッく
ちをのこ子ぬ吹こ。わんこ大和屋の文藏さんとの
入も不仕合る入きれ抑角ノ内家さんでとろのく
ヤレ嬉しやと思ふと。直ようくるさ門て一体ノ
こんご出こ子とのの物ハ何ら文さんの組類内とゆら
の呼く須門く居るすこ子ごそうごろれ手組張と

四ツぎり
之用心

三日月二

いの人も嘗めやくとすの苦しがりで有と所が十兵
一生の病氣でよん所ろく アノむすめがるみ こうちく
引取うと所が有内義さんがうくうりく間もなく其
人もつの先んで来まうと出ひる世。サアとでお内
義さんが永の病氣ぐ物入が多ろうさうよ何や
かやで。減めようちもさうちものう稼くようてアノ子も
かりて居ると所がどうも見兼て。とうりの店よ出く
居る傷さんよ。終の夜をたるして私も来
生のやうの女郎衆よして店へ出ておれる世且那
さんの苦しのうの子を見てあるが世うえんうらと隠ぐ
のたるし。お傷さんもそれを吹て涙をとがして可愛
そうぐとふおもうとけれど脊よ後とあらぐうら体さ
が稼くとのうて。且那さんよアノ子がとうく詰ませと
噺しと所が。文藏さんがあくのう氣性ぐうら。以の外後を
立て。とんぐ夏ぐアノ子ハ沢あうておらが変あぐうこと
頼うとのぐ。お病とのふハ去る お屋敷のお屋敷。うく

ものく代が代うら。おのら達の内のようの高賣体の
呼へハ。なるうさる夏もあるめく。警へなるが舌をとのく
ちれバとそどのしてあるうさるそんう夏をさるものさ
とる物うと。けんもなろくう挟投ぐうう。とのうて何が
お勝さんがよく商をするとのうと呼が。店を仮て居る
夏うるるバ泊つハとら子。切だうりとのものごうら。今日
くふさーつうくるを。アノ子が見るハ見て。先須文藏
さんが頼うて寝て居るさるうちお勝さんとなぐんを
きて。見ればさんとかくして。店へ出るすうと所が。この者
めやアのくるもあんまりすくれく。とてーどものーふる駄
面だろうりのうへ。あんる入柄のひ美しの物とする
まるる子が出さんざうら。サア判判よろうて公間の
ものるる夏ハく。ろんあの子のひまで居ることのう夏ハ
つのーしられく。戸が明うと出ふとまるる。夜もちうみと
賣よ店へ出るるとまるよ客があぐるうら。そまでみんな
少あの子の夏を三日月くとのくまとよ　八「ムくそうやう

うえとのゝ夏ぐ「霜にちらすを見さだかつこと
のゝ夏ぐとサ「そして アノ子の名ハ何とゆ「アイ
お仙さんとゆひます。そまで氏頃ゝやア三日月あせん
くとのゝちやア。氏ともでうるものハぐずのやせん。其
お義でゝとゝーどもまで根義よ。お客があつゝます。これで
文藏さんゝどゝも今とうちやア。あつゝぐうるとゝのゝて。
おちやゝのておきつゝさうぐぶ。大分いくあんべゑぐとサ。
えでも評判ゝくうまゝものハおせんさんと仙女香とゆ
自慢ぐ「ゝやくゝちおう成りどうゝのそうゝうこうゝ
行くゝさぐでゝあつけ行くで。ゝえゝ所へ初でりゝこゝらのぐうゝ
ゝ「まぐ「おゝゝアノ子ハね。みゝゝお客ゝ沢をのゝて
床へも何ゝも入まぐゝ迎ゝとゝゝ。そまで迎ゝてお客が
かゝのゝうゝこのゝとのゝて。貳朱の一ッあのて行人も有し。
まゝ中ゝやアゝの噂を聞て驚くの侍さんえそが脇
たのゝゝゝまゝて涙をこぐゝして氏間も小判を一両まて
のゝとうゝよ人ゝよ人鬼とゆのハねくものゝこねくぞ。

モウ昼ごとりんくて。お天道さまが真西よりうつる八ツ
後の時計が九ツ時ぐんのけんとうぐのうて飯よりうつ
ぐらくりんくる墨屋の男がきのこふうの墨のあるを
ちうとゑのうくのせて来るやうがつてけつまづいてあ
こと来るやうがつて。何の仕頃ぞやうがつて。あんる夏を
せずといく。正直よりまにさげて。ねぐんも見をたとべを
のひよくいらの墨屋の若い衆がちのうくく墨をのを
てあるくバ。ちんの骨とりのぐ。中くく急よりまれを
あるものじやうれへ。ちらア武士
もも二丁町近所よりつのく居こぐ役者の中おを
きぐ衣裳袴とかつのでこ階のたーごとあぐるくこ丁ぐ
ちんうぐ変こ。おのひ物を肩へちうくくぐけて何の
若まるく階子をあぐるぐうまてこのこ。ドレ行てこうう
ちこ「ちアのくぐやア行くら」ハ「アイト」〇「亭主時頃もる
見ぐ。ちや昼花を春のうる雑ひうぐる居花往さまる
きこの客人の袖引とりて斬毎よ「コレサ」とうくく町人

さん侍さん。コレサ息子さんとうてのきこえほどもきれ。
貴賤群集のそのうちに。未かくる人ふ不知火の篝系
あくうの國侍浦次の辺うとよ立寄て　國侍「こやく四
門番くト大変よびこたに浦次「ヲイ吉やとんぎ
拿人くふきもちぶ新作合
番狂言うの奴が来やうぐうさ。おいらッちの夏さ四門
番ぐとこ。何とのもの　吉「路次だんごうら四門番も
あんうい夏ぐアイとのやうる　次郎「ヲイとんうら。エモシ
門番でどざりやすぐ。さぶかうとうぐら何の用でどき

うと申子子　國侍「ムく貴公方ハ左様うこら。ひおあ家のの
く門番でどざろう　次郎「エイマア市門だんのようる
ののでどざりやん　國侍「ムくマア市門番のようなもと
仰せけらるまバ。外の役ろう兼帯ろて相勤らく
のでどざろう　次郎「エイもんるあくひぐうの沢でもど
ざりやせん　國侍「扨者夏ハ遠国の産でどざろう當所
ハ初めてのもで。向不案内だやぶ。爰ハ何とや所
ちやて　次郎「エイ　とろく。爰ア鐵砲店でどざろうと申す

四ツ限
今要心

四ツ限
今国鎮

國「ハア鉄炮店ハテ異な夏を兼こるものでござる。
左様でござらば爰ハ鉄炮店とゐいさる謙斎ハ當
時武夏盛んよおとうとくと兼らくこと嘆くよ這ぬ
夏でござる。見うけまする町人百姓も多くもれ見
るが。鉄炮の誓古をいつさくとハ滅ふ治世の乱を
忘れぬ古人のいまゝあとのおこしうつゝる筆でござる
吉「ハヽヽヽヽヽとゐいハ大笑ご爰を鉄炮店ごといつくら
鉄炮の誓古ぶごとやアがうくとうぶ國「ふやく若イ
者シテ玉ハ何文玉じや 吉「エイ玉ハ一ト切ア百玉でと
ざりゆす 國「ハア何と中百目玉じやとやうさてく
てまとハ皆上達る人ばりと相見へるの。何よいく毒
誓古と拝見いくます夏ハうるまのう 次郎「アイ這入く
ゐやうーうせへし。かまふ夏ハどざりません 國「そまハ
ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵でどざる見受まみまべ。みるとまと
這入るじハ。何やら音妻どすもろーまるがぐまろと
通ゐいくます夏ハ。うるられ笑でどざるろ 吉「アイ何で

おうこひうきうとやー　國「ハテ如何様の夏とうこひ
おろでどぎろ　声「アイ今の流行のようとのでも二上す
の新内そうこぶー何でもよのどぎろりやす　國「イヤ男共
左様のもの一向不案内でどぎまえば初めの初り稽古
どもいてこと語をうこともるのどのどぎろの　次郎「アイ
うえでもるのつけうきりやー　國「あらら見えぎ
さまの「高砂やー」蒲ゆよ帰とあげてり　ト
ひうこ彼ともぐくろ局居のあるとろをを巻くうこぶくーけ

様も彼の三日月と謂名せる芸女の由来を易めるに。その
所詳らかずといくどすぶ。家清女の風あるく。
和哥八のすきらうり十種香並びに月あるひのこぶ
何やまれ女の業ものとてくらからず。いろる
ろの姫君とのもも耶ーからね容儀うまとのいろる
病世のやめろ達とよ春ものるやぶ。浮川作ようるやぶ
のまとろ真ろーー浮をくろろ題単女郎あ鶴と

ゆる事を持参増ハさすがこゝまでの。お仙を不便と
勢の伝づくひでこゝのりきゝ「お仙
きん今日ハいろ〳〵と遠うて。おもろしく寒い火でもあと
あてゝうくあてゝまうてゝ。陰でもひくことろの。歌
ハ廿三日ハごろも顔の色でころうら。うちやう兼ど
らまてうらぬよ。まひとろ〳〵顔ひでもあこさらうゝ。
そまたうりが苦労ようろてうられくうこ。りんごや
花屋はまくとが。他人のやうやうやられく。うこゝ
実の妹とりすも不義うこ夏ぐが入間ハ七溝ハ起とやらの
夏もあるやらうゝらぐ何もきゝく〳〵ひうきろ夏を
ゆくゝ。芝居のまるとやらぐ行くぐ時代くぐアる。
古い御来の文の通りで。時代時兼くあきらあさんせ。
横丁さく大根つむぐろ。そまたお前の身のうくぐ。旦那
きんの嘶〳〵とぐうろくく代ぐ代うら。私どもと嫁組
でうゝも繁ねくお方ぐこのとうぐ。そのうのお方が
とんうる身のうるうんうきろをいのぐ。よくくうる夏でハ

ぎりと手を出すうが。何ぞ面白ものの事も御ぎりません。
なさん清けまぶ。言へどのような賤しの勤とをこそ。
誰に取繕ふ遠義する事もうの。植てれこそ花のそば
たの里まうこ。ぐらとそ見いのやしけまくやら。
かんのまこ。と事を変がとんな帳在行る事八の手
ども。お前さんがうく出存ぐらう。おらン内の源次さん
も常不断あまくさんの事を可愛とふがうて。どのう
ちとあげとんぐぶ。近い者のおのら遊ぶちら

まやうろくいうれく事ぶ。一日うちともあくしと
おもうまうちく氣をつけてあげやがいくと私共へも
いつてどぎりまず。ハイ。誠に有がとふどぎります。
かんよお粥さんあまくさんを常くらら氣を付て
まず勇もあぶ出深切うまこのいとまあっとがこのとも。や
よふいどぎりまぬがのつけ出事を教ずる事ら昔の
勇て有ふうとやふというそ悲しくうてうりません。何
かの事八且那さんの新でちぬ要うまこて出存ですどぎり

生せうが私がとのの見入分ようすることを望う御方の
為でハ私ハ何どいさづらをなてせうふる者ようすこ
ろ年も沙のでゆくに奴徒者とおさげすもも有るけま
ど。さらくそふーと訳てハどぎり生ぬ訳をしバ現在
の母の悪変を訴入も同前そまとこあとあらさる
ゆハのーなすもせず。以前の且那さんの病氣見ふんを
ゆれて我と家内を火の中へ飛込んでせうふる動とから
ぶ去てことど。お客命ハ訳のて脱身ハ今日までけう
されど神や仏のお恵ゆら適ろの金と貰ひうけ且那
さんを楽ことすどをすーたこと滅ぶとあーたとみなく
乃夫祖さるのおーげーやと且夕かんでおーさまるよ
又どふいふ夏ゆやらも前ものでが其ようふよ安さーうのよて
下さりますと漫ーよ悲ーうろて。決ぶとがまと成ぬ
ト袖を顔よおー當ていとさるぐーとうげくふぞお物ハ
仙を法のんとまーアとうく何のそんるよあーまろ
ゆの夏をのふるハ紙へるこ。今もの通りお前のこよ。

ぶようえんをすつかり全く徒でハうるといふ夏ハうれぐ
且那さんの噺で聴て居るうち。そんな夏よりなほ
あのでハうるめが。まつ花の咲時も。ようらかうらずく
もんな夏よ苦労よ。短い熱い夏でも。おさつ。ばひでも
するよりゝ夏があつてハ。譬へ今とのふるで。狂れさうの
債のおもはるさらのでも。落でどのやうにお業でうつされて
おもうさうく。その父母さんへこのて。四郎等でござるまも
ぶようのはまたとそ露文まのよく。まとのよのおまおく

有ようも。おつと幸抱をして和を出んでさく居るぶ。まつ克
夏もどぎりませの。泣顔をして白粉ぐすぐてハ店へ
出早く。今日一日のあんぎぐうるのサく泣顔を隠して
早ハお客を引うさのトうぐさのうち入ひ嬉とハ二世ぐて
とも。當番のおさこみぐ。赤ぐまでもけもちひ。源次「ライ
そうぶく。お務ゲ店へもちうてあぐ。お勝どの
ぐ。夫ぐらめんくぶいうるちつと借せ。張ふこの頃ハまんぐうる
ふのてくうるら。ぶぐ。ぶち奉ふとまらァ。お仙さんく

今日ハどてめぐべ。ちろとあめくも深くきろせく。怪し。仕全盛
ハ當時江長屋うちぎんやの一とうて二の行くあめぐらら。
あめくぐひまうるら外ハ脹みたづ。やらが若衆うんぞく
勿論の夏ぐ。うろてしぬ女郎衆さく。とんろふ拵んで居ろ
ものと。そのハいのものあらが若衆も。ひ頃いく客でも
茶くろして。めろうくんがいくが。何でも怪しのて。
ろ理でとろちが来ても。おろうる顔をしていやがるが。
めてこするいぜあ仙ハ呼れ。雑十二サ源さんそまが
あまくのまくより氣ぐ。あまくのまくハとたハそまくく
噂だろりいくどしろ。又ろの呼べでも這入りハ
ちねくうとのうて業でうるさい程ーあも相談を
おしぐ。そま程までる深切る女房をうちやりて
おのく必浮氣る吉をおしぐ。れは罰がめろうまを
一ヱあ仙さんあめくもろうやう郷ぐみてまくの。二人
うま合で好る夏をいろ。ロハ頑法るのんぐ。何の若衆

うえぞう導入のふものろ。せのうえーくるとてーぐまのもて
猫草のぴっぷくも吹貫て。ぴすぐあくきるとろこ。性ハ何ら
おのーろの夏ぐ生まさもんぞうら。とうちハあてちんお
する氣ごうら。うのも考れく夏をいうて。あーふひうら
きろて。切まる氣ごーのうふ。百も考うちごけまど。
きまろ男とのふ怒。とん食みまんるもうで。そハいうれく
めで。きぐくと長坪とふうて居て。突出きまるも和
ちのーで浮ぼくと馬鹿る面をーてとふーて来るも

あれまり脅威ぐ祝くどうや帰うとゆせうトとるる驚ハと
涙ろ「コレ源次さん何のとろこう面白くすれくぐと
ぞを酒でものんで来て。其ハ機嫌で人ぐらーも大ぐの
あきぐよするぐのひ私ぐるを考らねろ何ぐのゆうに當
とすりの他ロもひうとのうまうや腹ぐ立ってたあの
そぐ尽こうら。男らーくとうくと噺ーー合てのきまを。
うまぐのあまくハ考ってきまるね。お何さんぐ何を知ってらすと
ぐあうらうとーーの向て。どのようのもうぐどうハト

決変。流失すること。からうの類。源一何ごとにてあるも
そぶつきつくさるる。帰一合て退去をきろ。なのえまたは
おそうとろう。ハアとうえをまて。あまたがきづくうりと
めごうらものそぶつきつくさるる。まきろそをあらでするられ
紅べうら。そんな横ぞうやうな言葉をとーらくてしらのご
ようぬ。ハくくよくもくくそんな夏を常紙ふもらまた
たぎりぎりぐるくく。何ぐきろうーまるる野郎でも女の方
からそのまたて真草ぢんなさいまーとしらて。
繁まうて居るゆうぐあるうのうるかとうぬ生通り
もうぞりときまたのよ切まそ申ろうら。西へでも東へでも
勝るものかうくらーやアうまた下ちとみうくまば。お勝れ
きくもーやぶりつくす。山道の思ふ同士のいさらのい実よ
意ごとはきらまーり。

春宵美談三日月阿専巻之二終

春雨物語 美談三日月阿専巻之三 雅名 本朝好逑傳

江戸　南仙笑楚満人稿本

第四回

此家の主公大和屋文藏病氣あげくのゝちふくと月代の延びてゝ青ざめ身ゝ小夜着を打きるとゝ溝濘して ど居こちらをうかゝ。お勝源次ゞ爭ひの耳ふ入ったや目を覚し打ちとぎきつゝ障子を明け　文藏　ヲヽ誰ろそこ ごそうくのうと思ふるら久しのうとゞ源公千話喧嘩

大概みするがいひ。折角とろくことあること所とも。あゝへ
達のお舊でおつさら夢と覚こと成程よくいつこ
めでたがけのいひ武士。書の音と目と覚すとゆら。
おいら達ハ不斷うらとこのの業商賣と去ていつから。
喧嘩口論でもうけ是ばいくこどくいろにとうく。
ちつと人ぶ大きこと変でもこもとと歩こ間遠くしやう
行くうと。どんうふよく窠入て居ても目ぶ覚る者サ。
ゆべ仲尊ちの礼と変くうこと酒ぶあつこ寒ず麦ぎこめ
一ツ盃ゆらわくう。おまこ幸ハあのてかーやの呼ぶ。店も
今日ハちつと時雨こ世のう。客入の足もとまらわくべどぶ
あんぎ直ーわ。サクく酒ハ去ふ。お仙やく一ツ呑わく
うト数のけらこと「ハイ有つこ難ふどぶりますぶ私ち
今ぶるうら何ぶりつこ癖ぶいこくのくうつこませね
ハテ癖ハ酒ハ茶ぶ。あつ烟わて一ツ盃ぶつこあを
うと直るのぶゴウ源公とうちくまつとうつ世。そとま
二戸子供ぶやアあつゆくー。世暮る夏とのうれくうんぶ。

嘸ちうづらをーやア墨屋へいらて。何でもあつこけく物を
取て来てこざろ〜。そのうちおらア銅とつけて居るら。
そーてお孫やお仙もとへ来て呑がいひ。おまゑ又ちうと
りつく焼せる真すもあるト。何とあらん物あつこげつまが
銅の勇の源次　源「うふおもくさんもんうふおづけくな
真ハとごりやせんかんのうちも言がうそ。とんうまく
りつこのめく。実ハとりくぶそと呼でもねくのサ。もんうら
銅方りうちうづ墨屋へ往てそりうそやうとや世う　文「
もんるら頂むぜ。何でも早い物がのひアノ子達がれの氣
かうづのこうづ又店の邪ア　源「アイト　源二ハそのもうそ墨屋へ行うちうづ人の
文花屋のうづ焼さーみ　文「サアく　お仙お　勝
香の物へハうちうづ墨屋へうちうづ焼さーみ
えど来るこ居店の働まるうづ文義ハ店へ銅とつけハまへ有合の
ちうとこうちく来れ。でアのくこる今日の寒さを呑れく
と考ま当る。サアく爰へと主ぐ銅お仙お勝ものでぐて。
その爰へつうりうり酒真もえハ浮ね物ひ　文「コレお仙お勝
も源公もひ爰ま居るぐふ世う。おまーうとこ行く緑ぐ

咲くもこんまろ咲くお仙がんじゃ　おまぶ先よりうこの口のゆう
でも絞ぎるくべうこうた。とんう勤をさせておくこと。
思のようるお仙でも絞くが第一そのおのこと時ゆう。それ
がんすてめく達へ行まれくようで何こうあごう夏ごうら。
改めて言てゆきるが一体兼く嘶してもおごとうりけるお仙
とのようのくうくまぶどのようる苦くこのて。敵よ火の
ちくゆうる夏がうことて。とんる賤しの勤ふもうる昼と
ゆどんさまるる女じゃうるのが。おまぶ先途の大煩ひ前後を

忘却くこうちお勝ゆめくと相談して。店へ知てそこの弱
のどてもお客を取るすぐ呼ろ男へ数してろくくゆも
咲れく性ろ保くにて方便るのでそまもうこの天性が
美しいる人品とのひ塵塚へ雇とのようけそ屋ふもうる。
鎌倉中の局方ハ勿論大後小後化粧坂のどうる茶屋と
いうこ迄も貴ひ風俗おやめうて代頃の芝の繁昌る
とこハ全くお仙がおるゆへぐと実前も湯屋でのそうー。
そまで世間じゃうお仙が評名を三日月くとのふそふよ。

其位評判を高くさるるかと。おまぶ位はどのやうに位苦
かろうと思へば。はい仙が現れさるとのつも教へくれまら
ぬが。ゆうべ谷さんの内ざそうよ。あて凡夫ぶ導を
あるべうされぬく夏はあるめくそふこと時ふは一旦はとふの
夏で音信不通ようろこ者ざら。何のも沙汰はうとくは
いふのく位のうちぢやアどのよふ腹をちくおるき
るくうあまれく。おまめくの戈覚でお客あるよ沢をいって
味へるうれとこの夏はけぢ独白ぢ
ゆふ夏ぢ。強言へそまはけつぺくことのくく出勤とする
からはぺはぺ今よ親れさるの方ら。どふのふ市さうとをうけと
時ものやアイヤケ拾ふ勤めはいこ〜ものぶ服はけぢさぢ
けりぺくよいこ〜ものこそまぶ言沢ようるのぢやア
ぬく。そん時はおまぶ科人ようるのて俎板の上へ乗ること覚
悟と極めて居るら。何も六ッうの夏はれぺ。そまよ舟
ちやアお勝も一方うらぢおれを。何うとをつけてゆる
ようそ。うろくうりて他人のようふのやア思まれぺ。

家来筋とも何とかいの夏ごやうの好くうこのあそこのゆら
戯場でもするやうな夏ぐ源公うらも勝へらどす
お仙と数のやうな手只者くらア見くれく。ア夏はおちやら
てあのもお仙ゝ流星をえき来て居ることのあるもッかもら
ゆうや身寄の四方でもどざろくごとうとうとうの嘶
でもあらうとあらら一時くとこうりゆうしておくぶ。
お仙ゝのきの紀を使てもとえ来ふどのぐ四兎うき
見て下さりませとうのくの。強くとしてふおくものくの四人便ゝ夏ぐどのろ已が
今日くそ夏相変ホして世を渡ら見るかどうらば。
あるまふひとふふ四苦労ハかりまものの未来へ往さ
まぐ伯母様くもどふも言訳がうのこふやものくゝ今更
あるとぐうく身を切ら夏ろうつらの夏もの。ちと
のうちの夏ぐ。ぐうと幸掘しふ居るものく店の戸の
がらうくとあまる音のこそびくゝ寿命がちぐまる
よふよちふあまぐ本公あまぐごとうてまんざら腹ろら

とんな高賣でもうの物分のこまねくけつもやで理ゞころ
らねくしやらいの夏ゞあるうら。鯛の上のさんげ出ー
かうくうてーゞ素性をやゞうこてもえハとのくゞ名ハ
ゆうたりあらしとかやされ紙くゞ出谷七ゝのうちの四象
人で何の何某とのまこと者でどざりゆすゞ十四五の
時ろうら。放蕩とゞーてハそまハく大儀の七ゝあ
の花魁ろう。建長寺前の廿四文の惣菜まで買ハうて。
おとらくハ道ゞやア孔子きるでもあゞぶれく程る学
問ゞーゞ明ゞゞ今とかうろく何のうのとのりこ所ゞ
尼の京物語とゆらで。者あらの夏うゞや貧乏人の新
場ゞうーゞと蓋のうい夏ゞらのうとうのちやうまゞ
脇ゞまゞまれくうらとんこる愚痴ろ夏とのゞ。今もいろ
通りあまもゞ一合もとうこ男ろうらとんこる商賣ゞ
まゞうりさゞろうちとのゞ物ハうこやくこいてのの事
ぶやア紙くゞまゞぶかゞ式ーといのものハろくこうろ
ゞ夏ゞでも紙くゞ八百屋ゞ八文ゞ買ハようこる揉ゞゞ

姓一うるとす。頼朝さまの御陣ぐ。どのうとまうまして
りまして。所ぐ。廿二の年の夏ぐ。何ぐ大磯ぐ火事で焼
て者まうて。時立沢ぐら花ある川ぐら。所ぐへ仮宅ぐ出
来ごろの。花の若い時分ぐやうあつて。まあつと決
郭の仮宅ぐ。ひとつぐ者ごとの蔵
者ぐ。かしと愛の誓言所結入つて。起て居てうるされる
ようと。で。浄るる。あつちこちの後ぐの花魁ぐ。
ぐ交友ぐ廣くうるに。入るめい金ぐ。

様を明まして。あつちふ一日こちふ二日と。先ぐら
先へどうつきあるく。初めのうちハ勝ぐをさつけて者
ぐ丸腰で歩行とのこと。どうも腰ぐさ。
悪まして。きとうるる。特ぐ。肩へ手拭をうけく
あるくのも。あまりぐ。ぐ我を
悪まして。肩へうけて。腰へ。きんぐりするようも成る。
鬼角四角の。ハきうるで。一重帯ぐよく十文字の
様ぐ。をとこぐ。ぐ時湯くいつてぬげこうてる

つゝ夏が有さ。そまとろら歩きまえまあげくのそてとゆち
とよく通次番とうろこさぶつと。噴花口論だろうり毎日
商賣のようふよあて居こうちふふうと麦の肉へ入まよ
這入こく悪くどろあんだのよさそふろと嫁くア
が永のうぶらひゆら。店の児ぶ矢落をすゆら。ア
木ゆとりよ二面がうろくうろうち又おまぶ病氣対上
でも仕事ふろどあやうろと思ふ所よお仙ばアア毎
理よ店へ出てこまさお蔭ぐ昔よ増して銭が毎日這
入ろハ有難ひが今もの通りお仙くと出捨ようく
加体うのこハ思くどどのも世間がうろいうらよびずく
ハすろものく養でハおんでだろうり居ろ。サくくこんな
面白くす行く喇ハよそふ一ッ呑人で精出して店へ出て
お客を取るがのひ源公もかうらずお勝と噴花ハよう
がのひ 源 イヤモウ金江夏うぶらお勝すこふしてお前の
お世話ようろ〜。お仙さんもうろく其ふふ夏を思ひ
うきろよふる児でするふ〜。ア九のるよ深実ふろうら知

た夏ごろから。爽しくてころくハ暑やせん。ゆ為ハ「それ
且那さんの山深切ハ。ほとゝ初めゐ仙さんす。俺おろそ
かゝハ思ひまする。今のゆが初めでどざりまするが
ほとんゝも乳母の世話よろゝまして。その縁で変る
酸へまのりまして。ひとゝ尼ゆよろりまするとゝ
ゆゝも病世のゐんでどざりまるやう程よ。どゆぜ歳
ほまゝゐ捨のゆ。ゐ世話ろまとてくどさりませ 大一く
ほまく見捨ろの見捨れくのと。他人ぶまゝの何のろと
ゐまろ方を見捨てゆらひとくろのもくくとのようる夏
ほとゝの早く店へ出るがゆく警へ一日とりとまもとゝてゐ
うちハ商賣を大切ほゝ稼くどやゝろうらねくドレゐまま
飯ゆ食ろゆ。ゐゆく達ハ飯ハどゆぶ。ろろく非暮でいく物の
ゴト 膳ごとを仙ゐ膳ゐ昼飯をすもゐろゐうちに
涼ゆ夜ぶて涼ゐとく爽を涼ゐかくりけと

第五回

青柳の横ハくさくろ三日月ゐ山ゐ婀娜くろ風俗を
見ゆ来ろ人よ買よくろ。人の山ろす房ゐ。ゆ為ゐ繁集の

吟之通鎮
弦次男限

そのうちに商人体のひとりの男。まづ浦あるき十九世
お仙が店をさしのぞき。あがりこげる風情。見てとる
とうそこが変りみて「コレサトのこと町人さん息
子さん。コレサコウくと呼ぶ洞さん。見たうの見なの下げ
すりぎ。
うち業のうちらのようなうちでうちらひよろく浮世の世渡
り彼の若人ハ立止つ 美「モシ 噂よりと三日月お仙と
ゆらハ女人の変くうるわど人のの女遠ハず美しの
りんごの。あがりてもようろうのうのとせうくお上りうち 美「そうら
ちろとあがりまーとうちくハ入るうりお仙ハ早く。門の
戸がらくひつーいうとおろうす様ぶり皆人の仙の様と
狩りする。お仙が容像より若人も。あがりそうに腰うちうけ。
のぶちくすまぶ吹変て。半ず煙草の様うとさく浅間の山
のそまうらで。脇のけむりとのそまでとものーとで。ひの
十すうぶみ。つきかうみまぶ若人ハ「モシ お仙さんとゆら
ろちハ変ら遠の所の者うぶら。代変の銀人倉子 無

判の高い三日月お仙さん。彫りの凄くこだわるお今が
初めて素性もの知らぬ入婿やたうつの仕合がとろふ
て出ようの商賣をきまるげる。油振合のも使ふの
縁とあら。彫りて凄て大変うの夏ごら彫りて凄
た其上で又こそくふも成のものでもうの。ごふいの決
ろと深切の洞よりお仙も涙ぐみ。いづくのあるところ
存じませねどよりふこの山深切よりのようの夏を云
て下さりませ。ろうんどあり川

きやるとのり秘す。腰らとのようの商賣をいや手者
でもどぎりませぬが。ぐく仕合ぐりとろふて出ようの流
是ふ者ぐこせふてのろうまれすぎうとひとをいて
ませうて。海より深く山より高いお礼を報じます。
殿へどす女子の夏ろうやや何とのふの業もあらず。
うみつもぎの夏ふ猶得ろくず。ふ世んうやと嘆の
うちかそくうとて親方さんの頼ひ。今日くすとなつて
藤のお務さんと相談極めの店へ出てもお客とやらふ。

何といふてよいやら。そのまぐさくもあらねども。人
さん為ようけのうて。無分をいうて傘をのうてどこで
らくらくこんにち。今日をおくらせませふと思ふの
樂く今日をおくらせませふと思ふのあるさいさうぐら
私ぶ。けふこうる者ようこうまくこい全く男の後でもど
ざうませぬ。いのようまれ紀あいく。とのいの男まうり
たてまくこと変ぐらぐふて。男ハけがされませぬ。変
の道理をおぼえけ。うさされまくて下さりまうるうら。
来とやらく這入る変ハどよおど免うきされて下さりませ。
ト。うまぐうぐらに教ぐこれかの男人まくこと変ハ
ふとろくり今子せうくどりのぐ。さてハ
ちのでどざるうりまくハ又三日月お仙とのふ女ハ素性も
いやしからぬ女ぐぐどよいの紀ら局店へ出くく居ろい。
全くくろ変でも考て。親の勘當をうけて家を後あんる
商賣をするのでおうと。時ふくの街の風流りまくも氏
近所へ主人の用で掛取ぐてらよ求まくこぐ一ッ盃
のんどその機嫌よ。終氏きぐ屋ハ這入のぐぐらくこ出
主人の店よ寄うまくこ。そのいの変ぐら。ぐまくも今

からうくりまさう寝る。代金で今宵はもう店を引て休まう。サアく返りまちやうと立上るを「と長くく折角おいでなさるを。酒など一ッのんでも罰あたらぬ。この位お金を並てもらのでうさされてゐる。あんまりあくふごぎりまチ美人「うえのくるづる斗りの夏けつして面白づくひうきまるまるの縁があらバ云捨て立帰らんとする折しも。さハ喧嘩ふこいふり

何がらの縁へかの男ふとの話にて金三百両を受取りてかりの寒さ凍きと泣くなり。はのきぬの子切屋へらのふのりしがあぐとうり。宜敷さうなる三百両をお仙がみせへうちまーしがかくとも者ならず二三丁来ておりひざ。前金家とあくとうてかーしてかまぶ。ひくとのさるがよ遊女ハあるきり出入をあらさるかぶ。いくばせんとてもらひしぶ。そもかくても仕方ふあらくかくうぶ。まりまりまーしとそもく夜ハ者ちくべのうくくとまり。又つぎの日も仕くくなぶむしく往てみまーでも牛ぐあるぶ。せんくまーは二三日かくとあくとまり。居ぶ。ぶとともくくてもそ金のあれひを必ずねバ家へハくらぶとかをさぶ。

ぶの日又のやさくあぶ行けバ大やぶ牛ちぶのの足けもつさ居なの者がを者ふれバ「ヲヤ居もあいくろものてのようまーやとふ

間の客人ようくあるとト姉ぶ体よ重ぶハ車一ッ。私も早速ここうとあふくまーど。アノ間遠ひで。居のあるおふ居さまをよん呼うて一日くとあくまーこ。何ふさて

なきこちと折入てとうてとちすゆきれば。うらぬ夏がある。
間ひとりが愛へ来て時拾まして往てこのがあるが。
まや何で拾ハしやすふさろうやらぬうと。いすまを仙ハ
ちうぶ沢 一うろ程ひろくて物がどざりますが。敵
の落ることろうやる品ハ何でどざります 重一イヤ
ひとりが落ふ何を陽そふ金でどざるが。ひとりが
物ろうら落そふとうくちふとかまふ夏ハどざらぬが。
アノ金ハ主人の物あまとうしのみてふひとりが勇ゆす
命ゆもかくがこそ死ぬ家ハ二三日内へすうえらず。そと変
ようとまのく居まうことあやアノ金がうのとひとり内へ
かくろ夏すぬ。海川へくとう勇を没げてうれば
ううとませぬ。そまとうとりが勇うらぬてきびうれば往方
もどざりませぬ。只今のひとりが親方とのふのハ。
主人とふやのく親ようすもの夏のふうの内夫婦勇を
物ようどびてもどざらぬ。内方ようらぬ内方ようも
ようきうるべうこうして折角往取て往て取てまうこ金と

呉服店へ往て。らしうそでかへりましたと。どの面さげて
のめ〳〵と帰りませう。そのまゝ西の海へ身をなげませうと思ひさだめ
ましたところ。赤坂にて又お前さまのお屋敷へまゐりました。それ
から其金を拾ふてあつて下さりましたる 亭主「アイ
成程 幸の財布に入て金三百両ほど今が拾ふ
て差上ましたが何のうたがひもなく。むかしハ人の心の実意
のと思ふて此家の旦那さんへも簡単にもおしらせ
ずにそのまゝ隠して鏡台の引出しに入置ました。今にお尋
ねなされうかと明日ハ尋ねてお出なさるかと毎日〳〵待て
おりましたが。一ト月立ても二タ月立ても尋て
お出なさらず。どふしたらよかろうと女房と相談いたし
薬ぢやと思ふておりましたが。今日ハまア尋ねて来てくださり
ました。お前さまを手を合せて拝むやらのかぎりなく泣いて。
心もはれ〳〵日本晴ぢやさようならバ正直なる実意ある絹の其の実の鏡の
それより正直なる志操砂の中の金を取らず金子取らず
正直寄あけての貴人の種とも成長も

文用少

しらまして素直なり。始終を聞て重蔵ハしばし涙をおし
のごひ先重一ツ有難ふござります。お仙どの人の噂では三日
月おせんといふ女ハ晋紳のおかし種。どの貴人高位のお娘
さまじやのと聞て居たどうぞそんな人の息子が賤しの局
店の女郎をしてゐらつしやる大方かんの字ぜきのものと存ら。
恐ろしい今の世の中うつかく一ト通りの事では行ぬ世なれば。
そんな噂をさせて客を呼ふといふ計事で有ふとおもひましたが。
容儀といひ志操といひ殊へ貴人高位でおかぐわね見識

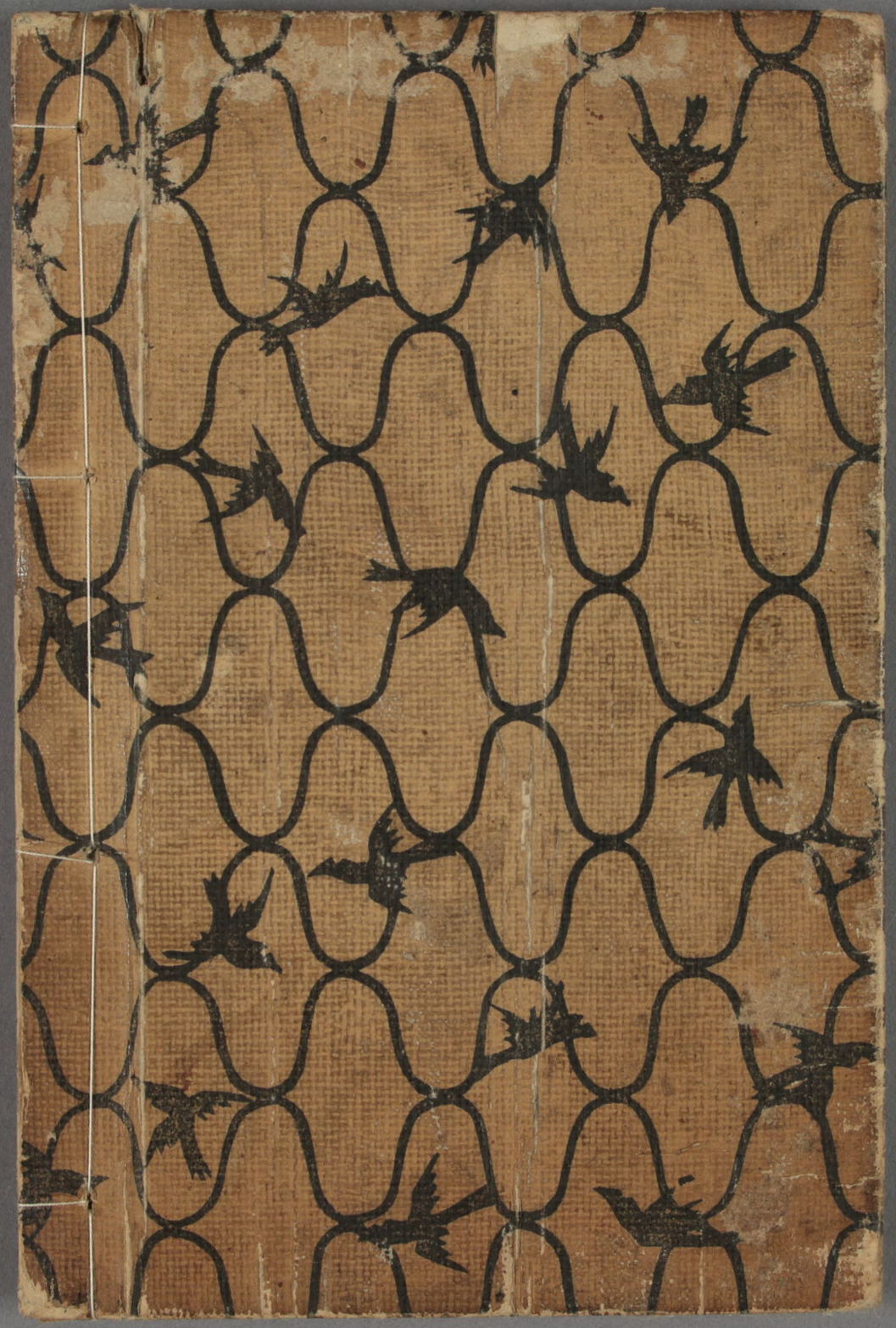
其あつてとまりハ只今がいぞみり札といふでハうけ取ませぬ。小判の
たしかなをとしてて下さりませ。三百両のその内五十両だけ
てお仙さまにさしあげれバ。お仙ハとまりをゆずらず「とまりハ又
けしからぬ事をおつしやりまする切店の女郎ハ昼夜あのさ
雅樂だくらゐをまつてさんしる金五両の十両のと大そうの金を
お貰ひ申すまするぞうがゆゑ又そんな金ハおまへさまのかね
盤まいでまとまりハおまへさまの御不調法する事。手まへ
の金ゆゑ手前が持て行ふ何の御遠慮がござりませう。

たゝで其十両がゝりの人ゝらのうら三百両も返して上ゝゝと
ゝゝませぬ。サテ〳〵人目よりからぬその内より早のも病へもうくること
うまさうませ。十金百両よ二日三日も。お病へうくらぬとゝもる
からハ〳〵ゝ〳〵ゝ病でもお養ゝうさまてゞどざりまさもう危
邦よ入らぬ。乳邦ふあしぢと皆時が間も四苦労ゝうきれ
まゝくも。ゝゝゝうる悪ゝ場くおとりうされこの系。必ずく
ゝゝも大切る物やうど。お持うさまてゞ時ハ四酒ゝあゝらず。
まゝて出ゝふる所ハちくとゝらぬよふ四附拵ゝませと。

ゝと信ゝる。お仙が祠裏義増く感どのり裏「イヤ主人の
ゝまでゝと思ゝていまて下さるお仙どのく祠有つと難ふどざり拵
ゝの祠よ取入て。モウ何ゝもゝませぬ。仙とゝりを家へかくと。
主人ゝもゝまさうせませよ。そんうゝら又仙間よゝるゝとゝ四
目よからうとませうト初もとく裏義ハどゝくよゝうゝ。ゝゝが家
ゝゝハどゝけ。ゝと裏義がゝゝゝゝ光町のゝ見ゝへ入ゝり早く
裏義もゝどくうくふゝふが前へ。裏義ハどゝくよゝうゝ。ゝゝが家
仙二三日ゝるゝよ往て大ゝの金を交ゝて返りませね
ゝ。さゝゝ〳〵何ゝと思ゝまゝ。ゝゝゝうがゝゝも左ゝ拵ゝ沢ゝ

ごとり生せぬ。生ずく仕金ハ、ようく四段めうそこれ生して
お納めうさまてまを。一日ハ不思議の吉又ハ、そうしうひ
ようく、まで。あるこ方ハ、夫婦へいとけうひまで。おどろく
海川へ身をうげて。あのようとも存じ寄ぬ。たとく
私が命をすてうまでとそ。仕金の返るとのよ吉又ハ、でもよ。
何卒して金をせんぎして。駆を頼んで。辱ねぶ。漸く
持くかくり生ことあるくさのぶ。ハ今夫婦あらの
二三日後よ佐く女ゲ谷へ寄方を。大年ハの命を夫婦ま
ゆうとも常平生ならのものくよりもうく。夜泊口泊を
ちこと夏すういあ。間遠もうのと思ふこうよ。暁ど
行ねばうらぬ正を。あ。を代ようゆうこのも。往こハ知れも
子も祖く夏うまで。お亀とも相談。上仕度具の法式
をも。ゆうろふとも。ちうて居ろ方ハ一ッハ。ふとを。
がそらのよりや。大金をとりて。ふの変ることのやと。それでうぎと
あ。をゆうこのぶ仕三日かくらぬ。内外の者ハ大夫
逐落をちこのぶろう。何のかのと口ぐよりてうと

皇六巻ーてそこハ岩屋。何々とこハ深のよゐものの
有夏ごろうと落付たらゐて居るぶあれよ遠とぶ
金を持ゐてかくつと重箱お亀何とおまゑが眼力ハきうの
めんごろう。何へともあとこれ夫深の沼もあるの。こうく
ゐつくりとそこを覗ーて岩すぐよのト小藤を十ゐ人宝殿
数刻よおそびける。

在則斬

春潤三日月阿専巻之三終